

## 二〇一六年度秋季企画展

### 「占領期の早稲田 1945～1952——新生への模索」

佐川 享平

二〇一六年度秋季企画展は、「占領期の早稲田 1945～1952——新生への模索」と題し、七年近くにわたる占領期に焦点をあてて、戦後、早稲田大学が再出発する姿を展示した。期間全体の入場者数は、一、一〇九名であり、展示内容は、玉木研二「火論 幻の学部」（『毎日新聞』二〇一六年一〇月一八日）、松村圭「戦後」縛る占領体制」（『共同通信 4NEWS』二〇一六年一月二八日）など、各メディアでも取り上げられた。

以下、展示会の概要と展示資料の一部を紹介する。

#### はじめに

一九四五年八月一五日、日本はポツダム宣言を受諾して降伏し、アジア・太平洋戦争は終結する。以降、サンフランシスコ講和条約が発効する一九五二年四月二八日に至るまで、日本は連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）によ

Waseda University Archives

— 新生への模索 —

1945~1952

**占領期の  
早稲田**

2016年度 秋季企画展

9/30(金)~11/6(日)

閉室 日曜日・祝日  
時間 10:00~18:00  
会場 早稲田大学 大隈記念タワー(26号館)10階 125記念室  
主催 早稲田大学 大学史資料センター 042-451-1343

早稲田大学 大隈記念タワー(26号館)10階 125記念室

入場無料

「(商学館)卒業記念 昭和24年度」(1950年)より

<http://www.waseda.jp/culture/archives>

※休シ10/10(月・祝)・10/23(日)・11/6(日)は閉室  
11/4(金)は開室

ポスター

る占領を経験することになる。

日本が敗戦を迎えたとき、早稲田大学のキャンパスは、学徒出陣や勤労動員によって閑散とし、校舎は空襲で大きな被害を受けていた。学生が続々と帰還し、講義が再開されるなか、荒廃したキャンパスの立て直しは急務であった。しかし、大学に求められたのは、「再建」や「復興」だけではない。

戦時中、国策と深く結び付いていた大学の制度・組織・理念は、敗戦によって再編を迫られることになった。また、民主化・非軍事化を柱とする占領政策のもと、教育制度の改革も進められ、早稲田大学でも、学校教育法（一九四七年制定）に基づく新制大学への移行が準備される。早稲田大学には、「新生」のための大きな変革が必要だったのである。

一方、敗戦によって学生たちが直面した現実は一様ではなかった。多くの学生が戦地や動員先で命を落とし、また、無事に復員・復学を果たした学生には、厳しい生活難が待ち受けていた。

占領期の早稲田大学と学生たちは、敗戦という戦争の結末をどのように受け止め、また、物資の欠乏という現実や、新たな理念の登場と向き合いながら、戦後の第一歩を踏み出したのだろうか。その模索の軌跡をたどる。

## I 早稲田大学 戦後の出発——組織と理念の再編

一九三七年の日中戦争勃発後、社会のあらゆる側面で総力戦体制の構築が強力に推し進められるなか、早稲田大学もまた、国策への順応と戦時体制への傾斜を深めていった。戦争遂行に適合的な組織・カリキュラム編成がとられる一方、津田左右吉や京口元吉などの教員が、自由主義的、反天皇制的であるなどの理由でその地位を追われた。

さらに、大学の理念にも、国策に合致するような解釈が付与された。早稲田大学教旨（一九一三年）は、「学問ノ独立」「学問ノ活用」、「模範国民ノ造就」を建学の本旨として宣言したものである。しかし、第四代総長・田中穂積は、自ら揮毫した教旨を刻んだ「建学の碑」の除幕式（一九三七年一月三日）で、「学問ノ独立」と「学問ノ活用」には触れず、もっぱら「模範国民ノ造就」を強調し、戦争の遂行にあたって「国民の先頭に立つて働く」ことが教旨に適用のだと説いた。

大隈老侯は此の碑に掲げた教旨を確立されて、模範国民の造就を以て本大学の使命なりと天下に声明されたのであります。（中略）即ち 明治大帝が勅語に仰せられた天壤無窮の皇運扶翼の為に、我々は国民の先頭に立つて働くべき義務を有するのであります。

「田中総長訓話」（『早稲田学報』五一三、一九三七年一月）

戦時体制への順応の果てに待ち受けていた敗戦によって、早稲田大学は自らが拠って立つ理念を、改めて問い直さなければならなくなった。そして、同時に、GHQやCIE（民間情報教育局）による民主化政策と、それに基づく教育改革に対応してゆくことになるのである。

#### I—1 校規の改訂と総長選挙の導入

占領期における日本の民主化は、GHQによる「上から」の改革によってのみ実現されたわけではない。早稲田大学における改革も、学校教育法や私立学校法といった法令の制定をまつことなく、自らの手で開始された。その契機

となったのは、第五代総長・中野登美雄の辞任である。戦争末期の一九四四年一〇月より総長を務めていた中野は、一九四六年一月、病気を理由に総長辞職を申し出たが、その際、総長の選出は従来の理事互選ではなく、選挙によるべきとの提唱を行った。この提唱を受け、大学の憲法ともいべき校規（財団法人早稲田大学審附行為）の改訂が、直ちに検討されることになったのである。

一九四六年二月に設置された校規改正案起草委員会は、総長選挙制導入のほか、大学の意思決定に関与する維持員会・評議員会、経営に携わる理事の在り方など、大学機構の様々な点について討議を行った。そして、同年五月十五日、総長選挙制をはじめとする大幅な改訂を行った新校規が発効した。

改訂校規第四条において、「本大学ニ総長一名ヲ置ク。総長選挙ノ方法ハ別ニ之ヲ定ム」とされた総長選挙制の詳細は、同時に発効した総長選挙規程によって定められた。選挙の方式は、総数九〇名の選挙人が組織されて投票を行う間接選挙制であり、被選挙資格については一切の制限を設けないものであった。

一九四六年六月一〇日に実施された第一回総長選挙人会では、一九四〇年に大学を追われた津田左右吉が最多得票（三五票）を獲得し、新総長に選出された。しかし、津田は総長就任の要請を固辞したため、六月二十九日、再度の総長選挙が実施された。決選投票の末に選出されたのは島田孝一であった。九月、第六代総長に就任した島田は一九五四年一〇月まで総長を務め、占領期における大学の舵取りを担った。

〔主な展示資料〕

○早稲田大学校規改正記録（校規改正案起草委員会 一九四六年）

○〔写真〕第六代総長・島田孝一（一九九三年～一九八七年）写真1



写真 1

I—二 問い直される理念——教旨の改訂と大隈精神高揚運動

一九四六年の日本国憲法、翌一九四七年の教育基本法の制定によって、戦後日本と教育のあるべき姿が示されたことに伴い、教旨の改訂を求める意見が広まった。

とりわけ焦点となったのは、「早稲田大学ハ模範国民ノ造就ヲ本旨ト為スヲ以テ立憲帝国ノ忠良ナル臣民トシテ個性ヲ尊重シ身家ヲ發達シ国家社会ヲ利濟シ併セテ広く世界ニ活動ス可キ人格ヲ養成セン事ヲ期ス」と謳う、「模範国民ノ造就」の項である。

一九四七年一〇月に設置された教旨改訂の検討委員会は、議論の上、全文にわたる大幅な改訂案と、「模範国民ノ造就」の項から、主権在民を基礎とする新憲法に合致しない文言を削除する部分改訂案を取りまとめた。結果、後者が採用され、一九四九年五月二日、「立憲帝国ノ忠良ナル臣民トシテ」の部分を削除した改訂教旨が発表された。

同時に、創設者・大隈重信の事績に立ち返り、建学の精神と理念を再確認するとともに、その精神を、もはや生前

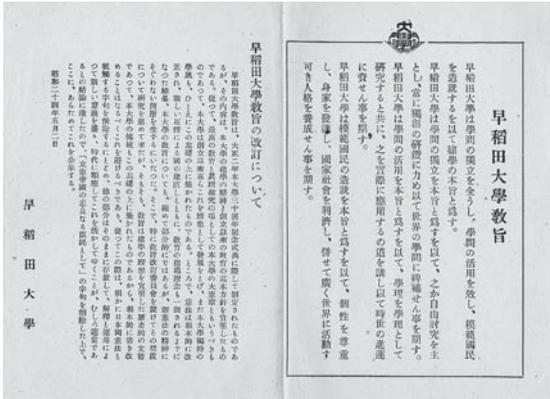


写真 2



写真 3

の大隈を知らない世代となつた学生たちへ継承しようとする動きが、大隈精神高揚運動として具体化した。その内容は、総長直属の諮問機関である企画委員会（一九四六年二月五日設置）において検討され、一九四七年五月の大隈精神昂揚講演会開催に至つた。さらに、その二年後の一九四九年には、五月六日から一三日までの一週間にわたり、第一回大隈記念祭が盛大に催された。記念祭では、尾崎行雄のメッセージ代読や、一九四八年に本学へ復職を果たした大山郁夫、ともに早稲田大学出身の政治家である斎藤隆夫、浅沼稻次郎による講演などがあり、大学図書館では大隈

記念展覧会と銘打ち、大隈重信の遺品や文書などが大々的に展示された。

〔主な展示資料〕

○早稲田大学教旨の改訂について（早稲田大学 一九四九年五月二日）写真2

○第一回大隈記念祭展覧会陳列目録（早稲田大学図書館 一九四九年五月六日～十三日）写真3

I—三 教職員の復帰と追放

戦争の終結と、GHQによって推し進められた民主化政策によって、様々な理由で大学を離れていた教職員が復職を果たした。

第一に、出征していた教職員の復帰があり、北村正次（商学部）らが復員して職務に復した。

第二に、戦時中に大学を追われた教員が復権を果たした。一九四五年一〇月二二日の「日本教育制度に対する管理政策」にはじまるGHQの一連の指令には、教育関係者における軍国主義者・国家主義者の罷免と、自由主義者の復権が盛り込まれていた。これにより、講義内容が自由主義的であると官憲に問題視され、一九四一年に教壇を追われた京口元吉（文学部）が復職した。

そして、第三に、かつて本学で教鞭を執り、戦前の思想弾圧によって逼塞を余儀なくされていた研究者が、改めて教員として迎え入れられた。第一次共産党事件（一九三三年）に連座して解職され、一九二九年の逮捕以来一九四三年まで獄中にあった佐野学（商学部）や、米国で亡命生活を送っていた大山郁夫（政治経済学部）が復職した。

一方で、GHQによる軍国主義者・国家主義者追放の指令に基づき、教員適格審査会が組織され、大がかりな適格

審査が行われた。この審査によって、すでに総長職を辞していた中野登美雄（政治経済学部）、中村彌三次（法学部）らが大学を去った。

また、教職員ではないが、大学の意思決定に携わる維持員・評議員においても、当時、大蔵大臣を務めていた維持員・評議員の石橋湛山（一九四七年五月一六日付）、維持員会長小汀利得（同一〇月二九日付）が相次いで公職追放の指令を受け、その職を辞することになった。

### 大山郁夫の帰国と復職

大山郁夫は、一九二七年、労働農民党中央執行委員長就任を理由に早稲田大学を解職され（「大山事件」）、無産運動への圧迫が強まるなかで日本を離れ、一九三二年以来、米国で長い亡命生活を送っていた。その大山については、一九四五年一二月に政治経済学部教授会で大山招聘が決議され、翌年には学生が主体となって大山郁夫帰国促進準備会（のち、「帰校促進会」と改称）が組織されるなど、早くから帰国と大学復職が待望されていた。大山は一九四七年一〇月二三日深夜に帰国、翌日には高田馬場駅前で学生たちの熱狂的な歓迎を受けた。そして、一九四八年、大山は政治経済学部教授として迎えられ、実に二年振りとなる早稲田大学復職を果たしたのである。

学生の多くは、大山を見たこともなく、また、必ずしも大山の思想を深く理解していたわけでもなかった。だが、大山の帰国当時、学生自治会委員長を務めていた吉田嘉清が回顧するように、大山は、敗戦後の「思想的廢墟」のなかで見出された、平和・民主主義のシンボルであり、学生たちは歓呼して迎えたのである。

敗戦、光の全くない暗い夜の後「いのち」あつて学園に帰つて来た学生たちが、形骸した大学の中で見たものは思想的廢墟のみであつた。「学問の自由のため」「軍国主義反対のため」闘つて亡命した大山郁夫教授の存在を知つたとき——「教えるとは希望を語ること、学ぶこととは誠を胸にきざむこと」——学生生活の眞の存在意義を見出した思ひであつた。学生が熱狂して先生を迎えたのに何の不思議があつたらう。

『早稲田大学新聞』（一九五五年二月六日号）

〔主な展示資料〕

- 教員ノ解職並ニ再任用ニ関スル件（京口元吉）（早稲田大学常務理事林癸未夫 一九四六年二月二日）写真4
- 決議（大山郁夫の復職を要望）（早稲田大学学生自治会 一九四七年一〇月二八日）写真5
- 辞任願（石橋湛山 一九四七年五月三〇日）写真6

I—四 新制大学の設置と学部の新編・新設

一九四七年三月制定の学校教育法によって、六・三・三・四制の単線型体系という、戦後教育制度の基本的な枠組みが確立した。これを受けて、早稲田大学でも、学校教育法に基づく新制大学設置に向けた準備が開始された。総長の諮問機関である教育制度研究委員会（一九四六年一二月設置）、教育制度改革委員会（一九四七年一〇月設置）の検討を経た後、一九四八年七月に新制早稲田大学設置の認可申請が行われ、一九四九年四月二二日、新制早稲田大学が誕生した。また、付属学校として、夜間四年制の早稲田工業高等学校（早稲田工手学校の後身）が一九四八年度、新制の高等学院が一九四九年度より、それぞれ発足し、一九五二年四月には新制の大学院が設置された。

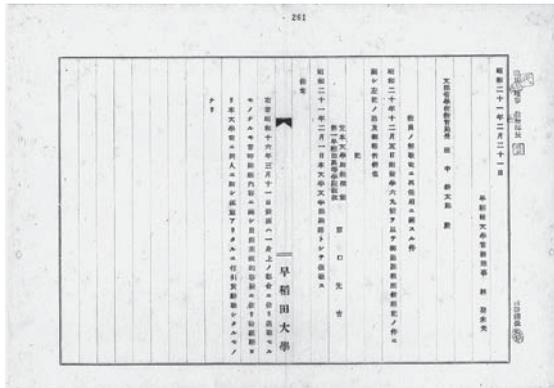


写真4

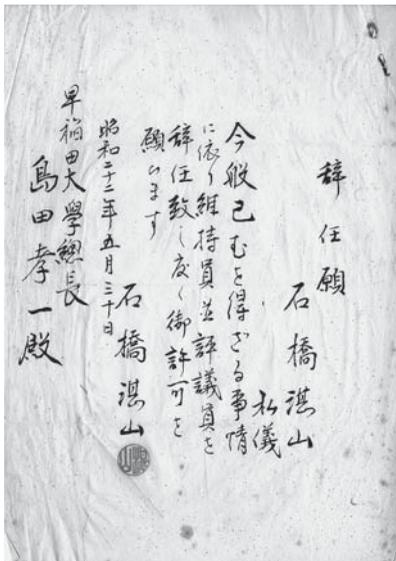


写真6

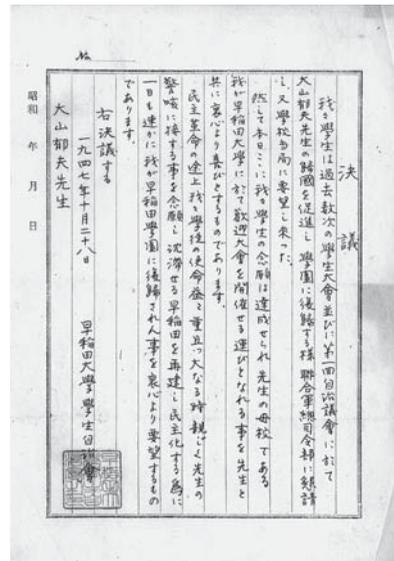


写真5

新制大学では、高等師範部を母体として教育学部が設置され、政経・法・文・商・理工の各学部では、勤労学生に広く門戸を開くべく、夜間学部である第二学部が新設された。

一方、旧制の学部、専門部、高等師範部、夜間開講の専門学校については、学部は全学生、その他は希望者を新制学部に移行させるとともに、一九四九年度より新規募集を中止して順次廃校となった。

### 幻の新学部構想

新制早稲田大学の設置検討過程では、人文学部、女子学部、工業経営学部といった新学部が構想された。

特にユニークな女子学部案の設立趣意書は、「日本民主化を徹底せしめんが為には女子の協力なくしてこれが完遂は期し難いものであり〔中略〕此の際早稲田大学は是非とも新たな着想に依る女子学部の創設を計らなければなりません」と主張している。

人文学部案・女子学部案については学部増設案審議委員会、工業経営学部案においては教育制度改革委員会で審議に付されたものの、設備や教員確保の困難などを理由に、いずれも実現には至らなかった。

#### 〔主な展示資料〕

- 教育制度改革委員会記録（一九四七年）写真7
- 早稲田大学設置認可申請書（一）（早稲田大学一九四八年七月）写真8
- 女子学部（仮称）設立趣意書（一九四八年三月）写真9

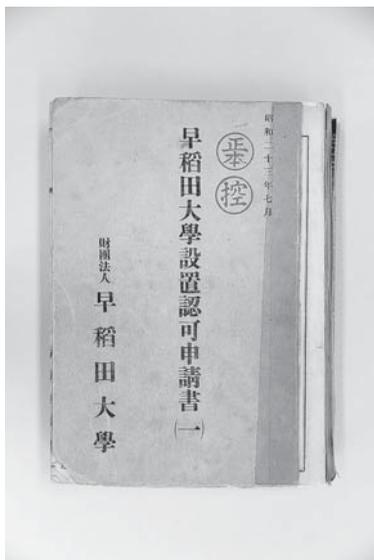


写真 8



写真 7

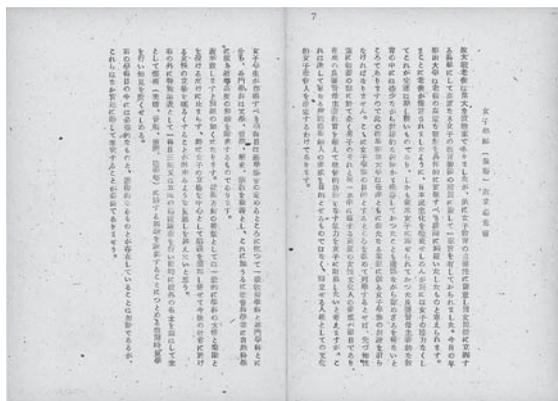


写真 9

## II 早稲田に学生が戻ってきた——占領期の学生生活

戦争が泥沼化の様相をみせるなか、学生が学業に勤しむことは次第に許されなくなっていくた。一九四一年より最  
高学年の授業期間が短縮され、繰り上げ卒業となった学生たちは戦地へと送り込まれていった。一九四三年一〇月に  
は、それまで学生に与えられていた徴兵猶予の特典が廃止され、五、〇〇〇名余りの文科系学生が学業を中断し、入  
営・応召した（学徒出陣）。さらに、翌一九四四年には徴兵年齢が一九歳に引き下げられ、徴兵対象となる学生の範囲  
は拡大した。また、残留した学生についても、軍需工場や建築現場への勤労働員が急速に強化された。

そして、一九四五年四月には、閣議決定「決戦教育措置要綱」（一九四五年三月一八日）によって、国民学校初等科  
を除く全ての学校で授業が停止されるといふ未曾有の事態に至った。

キャンパスから学生の姿が消え、教育機関としての機能を停止したまま、早稲田大学は敗戦の日を迎えたのである。

### II—1 学生の復員・復学

戦争の終結によって、戦地や動員先に散らばっていた学生たちが、キャンパスに戻り始めた。敗戦の報に接した状  
況も、その際に抱いた感慨も一様ではなかったが、福島県郡山の第一二航空教育隊から復員した林幹弥（一九四七年  
文卒）が述懐するように、学生たちは、戦争によって奪われていた学問の機会への希望を胸に、続々と早稲田へと戻っ  
てきたのである。

高田馬場の駅を出ると、復員服を着た学生の姿が道にあふれていた。それは敗戦にうちひしがれた姿ではなかった。「中略」あのいまわしい軍隊の桎梏から解放されて、学園に帰ったという安堵感やら、学問に対する希望やらがiriまじって、大きなウズを巻いているようにさえ思われた。

林幹弥「友の独り言」〔早稲田学報〕七三三、一九六七年七月

もつとも、早稲田への帰還の道のは平坦ではなかった。終戦から半年近くが経っても、休学者（専門部・高等師範部・専門学校・高等学院を含む）は在学生の三割余りにのぼっていた。未だ消息がつかめていなかったり、戦地から帰還できていなかったり、あるいは、東京の住宅事情・食糧事情悪化のため、帰京を果たせていない多数の学生がいたのである。また、経済的事情から学業継続を断念する学生も少なくなかった。

#### 還れなかった学生たち

学生が陸続と帰還を果たす一方で、戦地や動員先で命を落とし、早稲田に還ることが叶わなかった学生たちがいる。後に遺族・校友の協力も得て行われた追跡調査によって判明している限りで、在学のまま亡くなった学生は二三二名にのぼっている。

また、戦争を生き延びたものの、長らく復学できなかった学生もいる。一九四三年一〇月一六日の出陣学徒壮行早慶戦にもベンチ入りしていた野球部の石井藤吉郎（一九五一年法中退）は、敗戦時に満州でソ連軍の捕虜となり、シベリアに抑留された。彼が帰還・復学を果たしたのは、実に約二年後の一九四七年のことであった。

### 植民地出身学生と沖縄県出身学生

戦前の早稲田大学は、日本の植民地支配下にあった朝鮮・台湾から、多数の学生を迎え入れていた。戦争終結後、祖国へと戻る学生の一方で、帰国的手段が得られない、あるいは、祖国の教育環境が整備されていないといった事情のために、引き続き早稲田大学での就学を望む学生もいた。だが、日本の敗戦に伴って、植民地出身学生は「日本国臣民」ではなくなる一方、朝鮮出身学生はもとより、台湾出身学生の場合も、戦勝国国民として配給などで優遇された中国人留学生とは異なっており、厳しい生活苦に直面することになった。

一方、米国に占領された沖縄は、敗戦後、一九七二年に至るまで米国の統治下に置かれた。沖縄の学生が高等教育を受けるには、琉球大学（一九五一年開学）のような沖縄の大学への進学、統治権を持つ米国への留学、日本「本土」の大学への進学という選択肢があった。なかでも三番目の選択肢を希望する学生が圧倒的に多かったが、その際、沖縄籍の学生は「琉球人学生」と呼称され、法的には「留学生」として扱われた。

#### 〔主な展示資料〕

○〔学生数と休学生数〕（一九四五年二月現在）写真10

学部・専門部・高等師範部・専門学校・高等学院を合わせた在學生一六三九〇名中、休学者は四五四四名に達している。

○外国外地出身学生数調（早稲田大学 一九四五年二月一九日）写真11

II—二 授業の再開

戦争終結から間もない一九四五年八月二八日、九月中旬からの授業の再開を命じる文部省の通牒が出され、早稲田

154

学 部		学 科		年 級		学 生 数	
文学部	文学科	文一	文二	文三	文四	文五	文六
理学部	理学科	理一	理二	理三	理四	理五	理六
経済学部	経済学科	経一	経二	経三	経四	経五	経六
法学部	法学科	法一	法二	法三	法四	法五	法六
工学部	工学科	工一	工二	工三	工四	工五	工六
農学部	農学科	農一	農二	農三	農四	農五	農六
医学部	医学科	医一	医二	医三	医四	医五	医六
歯学部	歯学科	歯一	歯二	歯三	歯四	歯五	歯六
薬学部	薬学科	薬一	薬二	薬三	薬四	薬五	薬六
看護学部	看護学科	看護一	看護二	看護三	看護四	看護五	看護六
計 算							

早稲田大学

写真10

155

学 部		学 科		年 級		学 生 数	
文学部	文学科	文一	文二	文三	文四	文五	文六
理学部	理学科	理一	理二	理三	理四	理五	理六
経済学部	経済学科	経一	経二	経三	経四	経五	経六
法学部	法学科	法一	法二	法三	法四	法五	法六
工学部	工学科	工一	工二	工三	工四	工五	工六
農学部	農学科	農一	農二	農三	農四	農五	農六
医学部	医学科	医一	医二	医三	医四	医五	医六
歯学部	歯学科	歯一	歯二	歯三	歯四	歯五	歯六
薬学部	薬学科	薬一	薬二	薬三	薬四	薬五	薬六
看護学部	看護学科	看護一	看護二	看護三	看護四	看護五	看護六
計 算							

早稲田大学

写真11

標記は、ヘⅡ「米国」、チⅡ「朝鮮」、タⅡ「台湾」、マⅡ「満洲」、中Ⅱ「中華民国」、カⅡ「樺太」、タイⅡ「泰国」、モⅡ「蒙古」を示す。朝鮮（二〇七名）と台湾（八一名）出身学生が大半を占める。

大学では九月一日より講義を再開した。もともと、キャンパスは空襲によって荒廃し、破壊された校舎六三棟、はなはだしい損傷を受けた校舎八棟、使用可能な校舎はわずかに二四棟（一九四五年二月現在）という有様であった。

戸川雄次郎（一九四八年文卒、後の作家・菊村到）が振り返るように、校舎の再建が進むまでの間、学生たちも教員も、劣悪な環境に耐えねばならなかった。

文学部の校舎もところどころ空襲で破壊された傷痕がそのまま残っていて、まことにさむざむとしていた。私は学生服がなかったので、軍服を着て学校にかよっていた。さつまいもを弁当がわりに持つて行ってかじったりしていた。冬の教室はまことに寒かった。窓ガラスは割れていて寒い風が吹き込んでくる。教師も学生もオーバーを着こんだまま、背中をまるめて机にかじりついていた

戸川雄次郎「廢墟のなかで」〔早稲田学報〕七七三、一九六七年七月

〔主な展示資料〕

○〔講義ノート 中島正信「BUSINESS ENGLISH」〕（石橋直幸 一九四八年～一九五〇年）写真12

石橋直幸（旧姓山崎、一九五一年一商卒）が筆記したもの。

○ヘンミ計算尺（HEMMI）写真13

石井英二（一九四八年理工卒）が使用したもの。裏面に「MADE IN OCCUPIED JAPAN」の文字が刻まれている。



## II—三 学生の生活

戦後直後、復学、あるいは新たに入学した学生たちを待ち受けていたのは、極度の物資不足とインフレによる生活難であり、住宅難であった。また、就職事情も厳しい状況にあったが、一九五〇年、朝鮮戦争の勃発を契機に日本経済が空前の好景気（朝鮮特需）を迎え、大きく好転することになった。

厳しい学生生活の一助となったのは、一九四六年五月、大学からの支援を受けて組織され、学生自らが運営した学生共済会（生活協同組合の前身）であり、食料品・書籍・文房具の買い付けと提供、アルバイトの斡旋などを行った。

学生のアルバイトは実に多種多様であったが、小沢昭一（一九五二年一文卒）は、学生時代のアルバイト遍歴を次のように回顧している。

学校内に張ってあった外交員募集のビラが「弁舌に堪能なる学生諸君来れ」とあったので、大西信行と一緒に千代田生命須田町支部へ行った。

それは、貨幣価値が大きくかわったので戦前の保険額ではもはや何の役にたたなくなった生命保険の既契約者の所へ「生命保険の切り替え事務に参りました」と言って廻る仕事である。しかし、それにはカラクリがあつて「切り替え事務」とはマッカないつわり、つまりは、旧契約を解約して、単に新規加入を募るだけのことであつた。（中略）

次は宝くじを街頭で売った。

その頃の宝くじは景品の煙草が、一枚につき一本だか二本だかついていた。私は、夜間にマトをしぼり、昇降客の少なくなつてからの目黒駅前に出て、煙草ほしさに買うというような客を目当てに終電まで立ち、結構いい

成績をあげたが、それでも冬の寒風がつらいわりには収入がわずかであった。

順不同でいえば、ピラ配りもやった。これも大西と一緒にだった。

東京駅の八重洲口と上野駅の地下道に小さい広告会社があって、汽車に乗る人々の長い列へ向かって広告放送を流していたが、同時に、その乗車客の列に、表が列車時刻表で裏が広告という小さいピラも配っていて、それが私たちの仕事だった。

小沢昭一「ああアルバイト」(『わた史発掘——戦争を知っている子供たち』文藝春秋、一九七八年)

また、いかに生活が苦しかったとはいえ、学生の娯楽が皆無だったわけではない。この時期の学生の代表的な娯楽は、比較的安価な映画・演劇であり、ダンスも流行しつつあった。とはいえ、学生の多くは、ダンスに興じるだけの経済的な余裕を持ち合わせていなかった。

〔主な展示資料〕

○〔スケッチ〕(米田晴二 一九四九～一九五四年) 写真14

米田晴二(一九五四年政経卒)が在学中、くじ売りのアルバイト中に描いた「新宿点描」。

○〔早稲田周辺の映画館のチラシ〕(一九五〇年前後) 写真15

○高等師範部女子学生専用便所設置ノ件(一九四六年一月二十九日) 写真16

女子の学部入学は一九三九年より認められていたものの、まだ女子学生は極めて少数で、設備も整っていなかった。高等師範部では、一九四六年四月より女子の入学が認められた。



写真14

写真15

戦時中、完全に逼塞していた学生の文化活動も、戦争の終結とともに息を吹き返した。一九四五年一月には早くも体育会が復活し、各部が練習の再開を模索し始めた。戦争で部員を失ったうえ、練習場は荒廃し、競技に必要な道具を揃えることもままならないなかでの再出発であった。また、GHQの占領政策によって、武道である柔道・剣道・弓道の各部と、軍事色の強い射撃部が活動を禁止されたが、一方で、剣道部員の一部が結成したフェンシング部、軟式野球部、軟式庭球部、自転車部、バトミントン部、航空部が新たに産声を上げた。

「学生の会」(サークル)も再開への動きは早く、一九四七年三月までに大学へ結成を届け出た会の数は一〇〇を超えた。一九四七年五月制定の「学生の会に関する規程」によって、会の設立手続きや活動内容の枠組みが定められる一方、学生の側では諸団体を組織化する動きが起こり、文化団体連合会がつくられた(一九四九年二月承認)。

## II-四 文化諸活動の復興

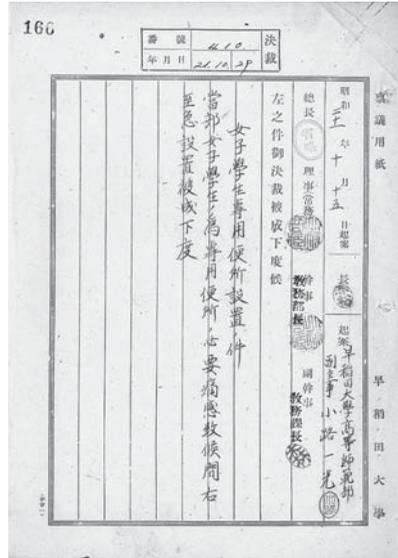


写真16



## II―五 学生自治会の結成とレッド・パージ反対運動

学生たちは、戦後、大学当局が進める諸改革に無関心ではなかった。授業料や、校舎をはじめとする設備の充実は、学生生活を送るうえで切実な課題であった。また、ほんの数年前、自らや友人を戦争に駆り立てていった大学の民主化にも強い関心を寄せていた。一九四六年一月開催の学生大会は、三〇〇〇名の学生を大隈講堂に集め、学生自治会の承認、私学の復興、校舎の復旧を決議し、同年五月には、学生自治会が大学の承認を得て正式に発足するに至った。ただし、大学側は、この学生自治会を新制の学部には引き継ぐことはせず、旧制の学部・学校に範囲を限定した。

学生自治会は、授業料値上げ反対や学内の民主化に関する諸要求を行ったほか、大山郁夫の帰国・復職を求める運動にも熱心に取り組んだ。また、一九四八年九月の全日本学生自治会総連合（全学連、学生自治会の全国組織）結成にも大きな役割を果たした。

だが、米国内におけるマッカーシズムの台頭や中国革命の進展などを背景とする占領政策の転換（「逆コース」）を受け、一九五〇年より共産主義者を公職から追放する「レッド・パージ」が本格化すると、学生運動は新たな段階を迎えた。

レッド・パージの動きが教育界にも波及し、全国の大学で教員・学生による反対運動が盛り上がりを見せるなか、早稲田大学でも、一九五〇年九月二八日、学生自治会が主催するレッド・パージ反対の学生大会が開催された。だが、この大会は、他大学生を含む参加者と、学外デモを阻止しようとする警官隊が衝突する事態を惹起した（九月二八日事件）。続く一〇月一七日、学生らは再び学生大会を催し、さらに、二八日の一件（ならびにその直後に企図された試験ボイコット）にかかわった学生を処分しないことを求めて、大学本部を占拠する挙に出た。大学当局は警官隊の出動を要請し、学生に多数の検挙者を出すに至った（一〇月一七日事件）。大学側は、「九月二八日事件」に関与した学生

一三名を除籍、八名を無期停学などとし、「一〇月一七日事件」で検挙された学生のうち八六名を除籍（後に六五名に再入学を許可）とする決定を下した。

〔主な展示資料〕

○早大事件の公判を前にして 総長島田孝一先生に対する公開質問状（吉田嘉清 一九五二年一月三日） 写真19

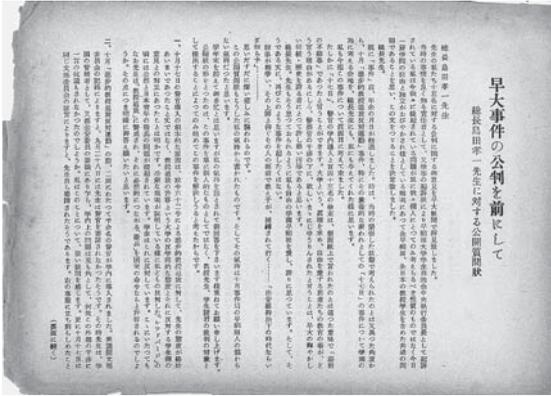


写真19

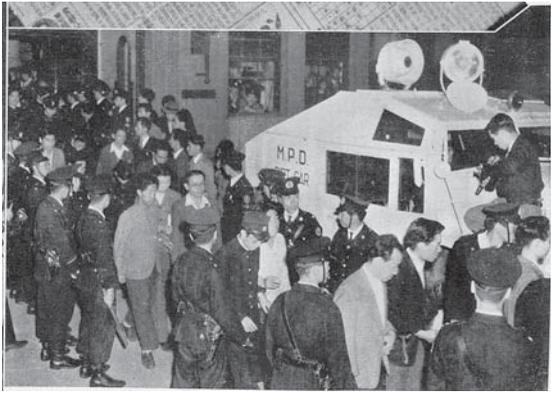


写真20

○〔写真〕「一〇月一七日事件」の光景（一九五〇年九月一〇日）写真20

〔卒業記念写真帖 早稲田大学第一政治経済学部〕（一九五二年）より。

### Ⅲ 被災したキャンパスの再建

一九四五年五月二五日夜の山の手一帯を標的とした大規模な空襲は、大学にも大きな爪痕を残した。全焼した恩賜記念館、第一高等学院、大隈会館をはじめ、煉瓦・木造の建物はほとんど壊滅し、被害はキャンパス全体の三割に及んだ。同時に、大学周辺も一面焼け野原と化した。

早稲田に戻ってきた学生が目当たりにしたのは、変わり果てたキャンパスと街の姿だった。

その大隈会館が一夜空襲にあい、すっかり焼け落ちてしまった。時計台のわきに一本の暖炉だけがヌツと空に聳えて立っているさまは、大隈さんがここに住んでいたという実感から発展した想像の古巣が、突然透明になっただようで、異様で強烈な刺激だけが残った。

菊竹清訓（一九五〇年理工卒）「私の得たもの」（『早稲田学報』七七三、一九六七年七月）

#### Ⅲ―Ⅰ 破壊されたキャンパス

空襲によって大学が受けた被害は甚大であったが、それでもなお、キャンパスはその骨格をとどめていた。これは、一九三二年以降、鉄筋コンクリート造の耐久校舎建築が進められていたためであり、同時に、演劇博物館の焼失を食

い止めた警手の山川義孝親子をはじめ、宿直職員たちによる懸命の消火活動の成果でもあった。

警手の山川義孝は、奥さんと当時中学生だった息子の武雄と三人で地下の宿直室に寝泊まりしていた。(中略) 裏手の人家を焼いた火が館の屋根裏へはいのぼった。彼は急いで息子を呼び、宿直室東側の窓下に用意しておいた非常用水槽からバケツで三階へと水を運び、手当たりしだい布にふくませては火にたたき伏せた。さらに息子に命じて書庫のなかのスチール製書架の棚板を運ばせて、これを塔から三階へ通ずる口におしあて、火が階下へ回るのを防いだ。午前四時から六時までの二時間、山川父子はなりふりかまわず火と闘い、ついにそれに勝った。

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編『演劇博物館五十年』(一九七八年)

〔主な展示資料〕

○本大学諸施設ニシテ戦災ニ依リ焼失破壊シタルモノ等  
ノ調査事項回報〔付図〕(早稲田大学一九四五年一〇月二  
五日) 写真21

### Ⅲ―二 キャンパスの再建

授業が再開され、学生たちが帰還するなかで、キャンパスの再建は急務であった。もともと、初期に取り組まれたのは、木造建築による数件の校舎再建と、損傷した

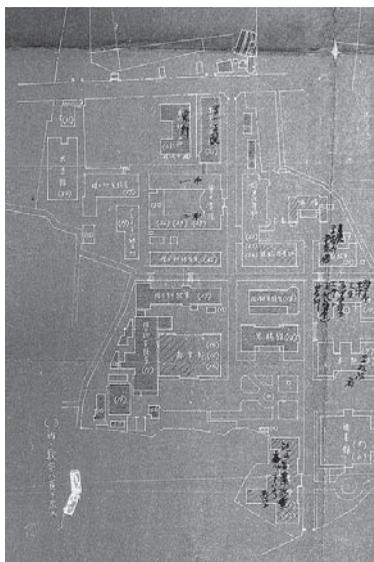


写真21



校舎の修復などの応急的処置にとどまり、再建が本格化するの是一九四九年以降のことである。高等学院および工業高等学校校舎（一九四九～一九五〇年、現在の戸山キャンパス）、大隈会館（一九五〇年）の再建に続き、一九五一年には、恩賜記念館と理工学部の跡地に、それぞれ法文系（現七号館）と理工系（現存せず、現一〇号館敷地の一画）の大学院校舎が建ち、翌一九五二年には共通教室（現一〇号館）が竣工した。

なお、第一高等学院については、戦後間もなく、千葉県佐倉の旧連隊兵舎（現在の国立歴史民俗博物館所在地）への移転が計画され、佐倉町との借用手続きも進んでいたが、実現には至らなかった。

〔主な展示資料〕

○元六十四部隊跡借用に関する件（早稲田大学常務理事伊原貞敏 一九四六年九月二六日）写真22

○再建された校舎写真23

『早稲田大学七十年誌』（一九五二年）より。左上：第一高等学院（旧制）の「復興第一号校舎」、右上：高等学院、左下：大学院（理工系）、右下：大隈会館

エピソード

一九五二年四月二八日、前年九月に調印されたサンフランシスコ講和条約が発効し、GHQによる日本占領は終焉を迎える。この年、早稲田大学では二つの大きな出来事があった。

一つ目は、創立七〇周年を祝う記念式典と関連事業である。創立六〇周年が戦争中で満足に祝えなかったことも

あつて、創立七〇周年の記念式典と関連事業は盛大に催された。記念事業の一環として刊行された『早稲田大学七〇年誌』は、戦後を早稲田大学の「高揚期」と位置付け、学内の民主化や学制改革、復興の足跡を紹介している。

二つ目は、「五月八日早大事件」である。同日、五月一日の「血のメーデー」に関わつた学生の捜査のため、大学側の了解なく構内に立ち入つていた私服警官三名が学生の吊るし上げに遭い、これを奪還しようとする警官隊がキャンパスに突入、多数の学生が負傷する事態となつたのである。この事件については、二〇日、島田総長と田中栄一警視監の間で、双方が行き過ぎを認め、遺憾の意を示した覚書が交わされるものの、一方の当事者である学生は蚊帳の外に置かれた。そして、この「五月八日早大事件」は、同時期、他大学でも発生していた、警官の学内立ち入りに端を発する学生と警官との衝突事件の一つでもあつた。戦後の早稲田大学は、民主国家日本とともにその歩みをはじめたが、その先行きは未だ不透明であつた。レッド・パージ反対運動や「五月八日早大事件」で問われた大学の自治、あるいは学問の自由をめぐる問題は、その後も様々な形をとつて展開されることになる。

〔主な展示資料〕

○警察手帖の全貌！（一九五二年）写真24

学生がキャンパス内に立ち入つた警官から没収した警察手帳の内容翻刻。

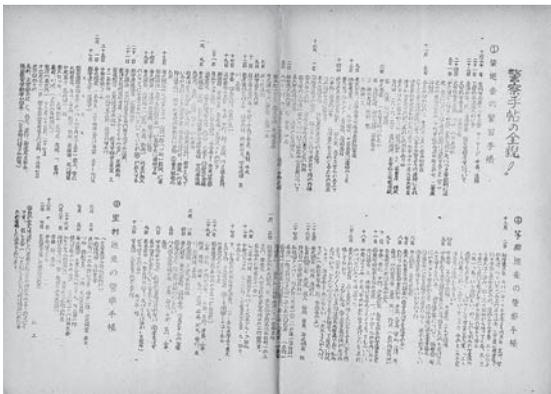


写真24